

あかりの家 自閉症療育のキーワード集(抄)

原稿;あかりの家関係者
編集;施設長 三原 憲二

あかりの家は、“自閉症者施設”として1986年に開設した。その間、強度行動障害を伴う人たちの短期入所(われわれはそれを「リハビリ的短期入所」と呼んでいる)を積極的に受け入れてきた。また、高砂と姫路における親子体操教室の積み重ね、障害児(者)地域療育等支援事業(現行、障害児(者)療育支援事業)から本格的に始まった自閉症者の療育・相談支援、ひょうご発達障害者支援センタークローバーの活動など、開設当初に比べて自閉症の人たちとの関わりは広く深く展開してきた。そして、2000年から横浜からスーパーバイザーを迎えて「療育研修」(事例検討と実地研修)が始まった。

そういった中で、積み上げてきた財産を、つなぎ、育てていく必要性を感じ始め、《実践の中から得たエッセンスを言葉にする》ことを始めた。

これらのエッセンスを「あかりの家自閉症療育のキーワード集」とし、“自閉症”と“自前”と“療育的なことば”にこだわって編集し、『第9回あかりの家事例研究会』研究誌(‘03年2月)に初めて発表した。それ以降、年1度の事例研究会の研究誌に毎年キーワードを加えて、版を重ねている。

以下、「あかりの家 事例研究会」研究誌から、「あかりだより」(施設だより)用に抜粋したものを転載した。

「Aさん」「B君」等の名前が繰り返されるが、別人である。 <S. V>とあるのは、スーパーバイザーからいただいた、直接・間接の助言である。

引き続き、加除と修正を加えながら、このキーワード集を積み上げていこうと思う。

あかりの家自閉症療育のキーワード集 抄 (1)

(「第10回 あかりの家事例研究会」(‘04年2月) 研究誌より抜粋)
(「あかりだより No.14」(‘04. 8) より転載)

1 わかりやすさ

「わかりやすさ」は自閉症療育の基本である。空間や手順や視覚化やスケジュール等の構造化された「わかりやすさ」は良く知られている。しかし、一貫性、振舞い方を教えてくれる人、状況を整理してくれる人、ズレを見抜いて修復してくれる人等の「わかりやすい」人や「わかりやすくしてくれる」人も重要な「わかりやす」である。

(1) スピードメーター

自転車で職場まで通勤していたAさんだが、いつもスピードを出しすぎて危険であった(推測30km/h)。一緒に付き添ったりしたが、その時は良くてもいざ1人になると結局は元のままのことが続いた。「1人でも自律的にスピードを守って走行できる方法はないか?」と悩んでいた時、スピードメーターの存在を知り、早速取り付けてみた。「スピードは19km/hまでは○。20km/h以上は×」とルールを決め、実際の走行データを後でチェックした。それからは、実に見事にスピードを守って通勤した。

10 成功させる — 登園拒否は自信がつけば無くなった —

A君の通所拒否は長年続いていた。たまに通所しても、玄関をスムーズにくぐれない。そういった相談に訪問支援をした。

作業中の頻回なトイレ通いとお茶のみによる悪循環、途切れがちな作業がトイレ通いを誘発する。そういった、これまでの状況を整理して、ある日、次のことを集中的に取り組むことにした。

- (1) うまく援助してあげられなかったことを本人に謝り、「これからA君がうまくいけるよう、きちんと応援するからね」と、これから援助する職員の姿勢を伝える
- (2) 大集団の中で宙ぶらりんの状態ではなく小集団（3名）の作業室に場所変更
- (3) 指示待ちではなく自立的に動けるための作業手順の構造化。（手がかりづくり）
- (4) 「お茶は休憩の時飲みます」等、約束事を文字に書いて掲示。それを場面毎に確認する。

そういった取り組みの結果、うまくいける場面が増えてくると通所拒否はなくなる。玄関もスムーズにくぐれるようになった。

1 3 環境を変えて取り組む

- (2) 場所を変更して、そこでは失敗させない

Aさんは眠前薬を服用していたが、ある時から毎日その薬を嚙んで吐き出し、手になすりつける行為が続くようになった。そこで服用する場所を、吐き出し続けているリビングではなく、全く違った環境の医務室に変え、同時に初回はうまく飲めるよう（絶対に失敗しないよう）対応した。場所を変えた初回の対応がうまくいき、以降もそこでは嚙んで吐き出すことはなくなった。

1 5 家族への応援

- (3) 家庭との連携、信頼関係

Eさんのこだわりは相当に激しく苦しい。集中的な取り組みで、あかりの家での状態やこだわりが改善し、表情も和らぎ始めた頃、帰省時の家庭では、全く別の大きな問題が出始めた。そして、今までに増して家族を困らせ不安が募った。しかし、職員が家に応援に行き特に問題とされた状態が改善するにつれ、家族の不安は消え、前向きの気持ちに変化していった。

<S. V> どんな方法をとる場合でも、我々プロは、親と意見が同じところから利用者との付き合いを始めなければならない。いくらいいい方法だと思っても、親が反対だと絶対上手いかない。薬でも、親がダメだと思ったら、どんな薬を飲ませても悪いことしか起こらない。お母さんの状態が悪くなると、連動して彼らの状態も悪くなる訳だから。

避けなければならないことは、帰省後の状態の崩れを親のせいにしてしまうことです。我々が崩れを親のせいにし、我々と親とがバラバラだと間に挟まった自閉症の人の状態は必ず悪くなり、その状態を三者が諦めて努力しなくなってしまうからです。

親は我々以上に苦勞しています。それを超える苦勞をし、結果を出さない限り、親たちはプロを信用しません。小さい時からプロは役に立たず、混乱させられるようなことばかり言われてきました。親に信頼してもらえば、連携することが可能なはずで。むろん「難しい」です。尋常な苦勞では、今のままです。

1 9 仮説をいくつ持てるか いつでも修正できるやわらかさを持つ

ショート利用のAさん、食後の食器下洗いの際、一寸した興奮を2回連続して起こす。「家で食器洗いをしてないからだろう」と考えた。ところが、お家に聞くと「家でもしている。ただ、ゴム手袋で洗っている」とのことであった。納得・反省！

ちなみに、しっかり説明した3回目から興奮することなく下洗いをするようになる。

2 3 良いことか悪いことか聞く。そして、こちらのメッセージをしっかりと伝える。

Cくんは、芳香剤・文具・お菓子等の買い物のこだわりが強く、毎日5千円から多い時で3万円も買込む。要求が叶わないと大暴れし、家族だけでは対応できず警察の協力を得ることもあつ

た。そういった経過の後、あかりの家の短期入所利用に至る。

利用初日、持ち上がっている問題に対してどう思っているのか、尋ねてみた。

「お母さんを叩くのは？」→「ペケ」、

「暴れてお巡りさんが家に来るのは？」→「ペケ」

「毎日、芳香剤を5千円も買うのは？」→「(飛びつくようにニヤツとして) マル！」

「ダメだよ。芳香剤5千円はペケ。そんなこと言ってるとうちにお家にいれなくなっちゃうよ。

職員も頑張るから、Cくんも頑張ろう」という会話であった。

どちらかというとうち安定的な1ヶ月の短期入所を終えて、両親が迎えに来られた。その場に職員が立会い、母親とCくんが約束した。

(母親)「芳香剤は？」→(Cくん)「買いません」、②(母親)「叩くのは？」→(Cくん)「ペケ」。そういった約束や帰宅後の日課表等を紙に書き、家に掲示してもらった。

帰宅後6ヶ月間、買わない日々が続いている。